

熊谷市指定無形民俗文化財

大杉神社祭礼行事

くず わ だ
葛和田のあはれみこし



熊谷市教育委員会

はじめに

熊谷市は埼玉県の北部に位置し、交通の要衝として、また水と緑に恵まれた田園都市として発展してまいりました。平成十七年十月一日に、熊谷市・妻沼町・大里町が合併し、さらに平成十九年二月十三日には江南町が加わったことにより、県北初の人口二十万都市が誕生し、新たな熊谷市としての歩みが始まったところであります。市内には、熊谷の歴史を物語る数多くの文化財が残され、当教育委員会においても、地域の皆さんに多大なるご尽力を賜わりながら、その保護に努めておるところでございます。

平成十八年度は、「地域伝統芸術等保存事業（映像記録保存事業）」として、財団法人地域創造の助成を受け、葛和田・大野・俵瀬地区の夏の風物詩、市指定無形民俗文化財「大杉神社祭礼行事」、通称「葛和田のあばれみこし」の映像記録保存を行うこととなりました。その土地の風土によって生み出され、そこに暮らす人々の生活のなかで受け継がれてきた無形の文化財は、地域社会の遺産とも呼ぶべき貴重な遺産です。しかし近年、社会情勢や生活形態の変化によって、人から人へ受け継がれてきたこの種の伝統は、存続が難しくなっているものも少なくありません。このような時、映像記録が果たす役割は大きく、本映像記録も、伝統文化の継承の一助となりうるよう企画したものでございます。また、本冊子は、映像記録の内容を補うよう配慮したもので、映像とともにご利用いただければ幸いです。

おわりに、葛和田・大野・俵瀬地区の皆様をはじめ、本事業の実施にあたり、多大なるご協力をいただいた皆様方に、あらためて深く感謝申し上げる次第です。

平成十九年三月三十日

熊谷市教育委員会教育長 野原 晃

葛和田河岸

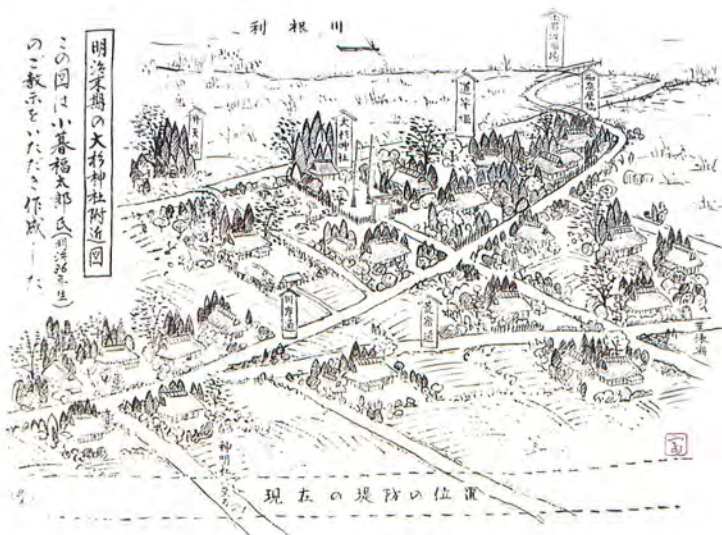
葛和田河岸は、『新編武蔵風土記稿』に「寛永（一六二四）の頃より江戸運送の河岸場あり」とあり、元禄三年（一六九〇）に幕府が実施した河岸の調査『関八州伊豆駿河国廻米津出湊浦々河岸之道法并運賃書付』にも名を連ねています。陸上輸送を人力と馬に頼っていた時代にあつて、利根川の水運は、江戸と各地を結ぶ大動脈として発展し、荷の集積地であつた河岸には、高瀬船（大型の帆船）などが出入りして大変賑わいました。しかし、近代に入り、鉄道網や道路など、陸上交通が発達すると、やがてかつてのにぎわいを失っていききました。



神明社(大杉神社合祀)

阿波本宮大杉神社

大杉神社は茨城県稲敷市、霞ヶ浦と利根川の間の高台に本社があり、鎮座する「阿波」の地名から「アソバさま」とも呼ばれます。祭神は倭大物主櫛甕玉命という神で、天狗のような姿をとつたとされます。江戸時代に疱瘡除け・疫病退散の神として関東の東部で流行し、利根川などを仕事場とした船頭たちからは、水難守護の神として信仰を集めました。県内では北川辺町や栗橋町などの利根川流域や、河川交通の発達した地域に祀られ、河川が文化の伝播に重要な役割を果たしたことを示しています。



明治末期の大杉神社附近図
この図は小暮福太郎氏(明治製糖社長)のこの教示をいたして作成した

葛和田の大杉神社

「大杉様」と地域の人々に親しまれている葛和田の大杉神社は、享和二年（一八〇二）以前に記された『武蔵志』に、葛和田村に祀られている神として挙げられています。地元葛和田の岡田定雄氏のもとめられた『大杉様由来』によると、昔、与助という腕の良い船頭が嵐に遭い、大杉様に一心に祈つて救われたことから大杉様の神輿を作ったということです。以来水難除けの神様として信仰を集め、船頭たちは葛和田の大杉様のお札を身につけ、川で遊ぶ子どもはみな、杉板でできた大杉様のお守りを首からさげていたといわれます。また、神社には今もうちわの印の入った瓦や「天保十三年寅十二月良辰 為船中安全」と墨書のある梁が残されています。かつての大杉神社は、利根川の川岸近く（上図参照：『大杉様由来』より「明治末期の大杉神社附近図」）にありましたが、堤防が築かれるにあたって神明社に合祀され、現在に至ります。



お札

大杉様の祭り

大杉様の祭りは、毎年七月二十六日から二十八日にかけて（神輿渡御は二十七日。現在はそれに近い日曜日）行われてきました。この時期の祭り・行事は、暑い盛りを前に、疫病除けを目的としたものが多く、代表的なものが、天王様とも呼ばれる祇園祭です。葛和田地区でもかつて、七月二十四・二十五日は天王様のお祭りでした。古く疫病除けの神輿は、川に流したり、壊すことで疫病を祓うと考えられていました。そのため神輿が豪華になり、壊せなくなっても、荒々しく扱われるという要素は残り、今でも夏祭りには神輿が扱われる地域が多く見られます。神輿が盛んにもまれる葛和田の大杉様の祭りも、夏祭りの特徴を持っていると言えます。



神輿蔵



神輿



神輿をもむ

大杉神輿

現在の神輿は明治六年に作られたもので、数度にわたって修理が行われています。担ぎ棒は二本で、台とあわせると重さは一トン近いといい、かつての神輿の胴部には、船を操る船頭の彫刻が施されていました。うちわの飾り金具や屋根の金具など、修理前の神輿の一部は、今も神輿蔵に保管されています。神輿の下の木組の台は、昭和三十年代からつけられるようになったもので、以前は家々から白を差し出し、その上に安置するなどといったといいます。また、近隣の村々から神輿を借りたいという要望が多かったため、明治十二年には小振りな貸し御輿が作られました。

祭りの組織

大杉様の祭りは葛和田・大野・俵瀬の三地区の祭りです。葛和田は六つの郭に分かれ、大野・俵瀬とあわせて八つの郭からそれぞれ当番が出されます。大杉神社の鎮座する荒宿は、特に宮元と呼ばれ、祭礼の一切を取り仕切る大頭、補佐である小頭を含め、十二名の当番が出されます。宮元では当番が毎年六名づつ入れ替わり、前の年に小頭を務めた人が、翌年の大頭となります。祭りには当番の他に、葛和田・大野・俵瀬の各地区の人々をはじめ、大頭経験者などで組織された大杉神社祭礼行事保存会、祭り愛好者の団体である大杉神社愛好会などが参加します。

(大字)	郭 (小字)
葛和田	荒宿 (宮元) 上入 (上宿・入山) 中宿 下宿 西島 向野
大野	
俵瀬	

祭礼組織図

サイノカミの行事

フセギ・道切りなどと呼ばれ、地域に疫病や災厄など悪いものが侵入するのを防ぐ行事です。宮元では毎年七月一日、字の境などにハッチョウジメの飾りを設置します。二本の真竹を立て、間に注連縄を張るもので、竹の根本には日向の長井神社の宮司さん（神明社管理者）からいただいたきた塞神のお札を貼ります。俵瀬でも同じようにハッチョウジメを飾りますが、他の地域は短い竹にお札を挟んで立てるのみです。また、かつて七月一日からの七日間はナナバンゲといって、夕方、各家のカイド（敷地から公道へと続く私道）で麦藁の藁束を燃やしました。地域によっては、藁束が燃えてできた灰で地面に境界線を引くことも行われ、疫病の侵入を防ぐ行事であると考えられます。



堤防上のハッチョウジメ



お囃子の練習



神輿の準備



御霊移し

祭りの準備

七月に入ると様々な祭りの準備が始まり、土曜・日曜の夕方には、お囃子の稽古が行われます。かつて祭りの前日には、行田の荒木や南河原の芝居一座によって芝居が演じられ、翌日の神輿渡御のお囃子も彼らが担当していました。現在伝わっているお囃子はそこから習ったもので、一度は途絶えてしまいましたが、昭和五十年代に復活し、小学校高学年の子どもたちが担当するようになりました。お囃子の楽器は大太鼓、中太鼓、小太鼓、鉦、笛から成り、そこにひょっとこも加わります。お囃子は神輿に先行するトラックの荷台で演奏され、利根川では船に乘ります。

祭りの前日（宵宮）

神社では、朝から各郭の当番を中心に、境内の飾り付けなど準備が進められます。神輿は担ぎ棒と台を取付けた後、屋根に乗る際手がかりとなる綱を取付け、水で洗った後、社殿の前に安置され、屋根に鳳凰が飾られます。一通り準備が整うと、神官（日向の長井神社の宮司さん）によって、御霊移しの儀式が行われます。本殿に安置されているご神体を唐櫃に入れて運び出し、神輿に納めます。昭和二十年代後半までは、神輿に移された御霊を守るため、一晚中見張り番をしていたということです。また、この時、天王様の神事も同時に行われ、氏子にはお札が配られます。

祭りの朝

夜明け前、一番太鼓が祭りの始まりをつけます。

昭和二十五年頃まで、宮元の男たちはこの一番太鼓で起き出し、暗闇のなか利根川に入り、身を浄めたものでした。また、祭りの最盛期には、どの家も見物にやってくる親戚などで賑わい、女性たちは朝早くから鰯のなまり、小麦饅頭、焼き豆腐の煮物、赤飯など、祭りにつきものの料理を準備してもてなしました。

この日の早朝、神官は大頭の家招かれて朝食を呼ばれます。神社ではその間、屋根の飾りが鳳凰から杉の枝に付け替えられます。神官が到着すると、神輿の前で出発の神事が行われ、皆で御神酒をいただいた後、出発となります。



神輿が出発



進む神輿



ご招待



神輿に水をあびせる

神輿の渡御

神社を出た神輿は、葛和田地区内を巡りながら大野地区に向い、大野の伊奈利神社で昼の休みとなります。その後、利根川に入り、俵瀬地区内を巡って再び葛和田にもどって来ます。近年は担ぎ手の不足もあり、一部の区間をトラックで輸送しています。

神輿の行列には、お囃子、幟旗、御幣、賽銭箱、大払い、拍子木が付き添います。幟旗は郭の境で引き継がれ、担ぎ手も次の郭の人々が中心になります。お賽銭をした人は御幣の一房を分けてもらい、持ち帰って神棚などに納めます。神輿渡御の際は掛け声がかかけられますが、もともとは「ワッシヨ、ワッシヨ」という素朴なものでした。

ご招待

神輿は渡御の途中、沿道の家々に寄っていきます。これを「ご招待」といい、門前で神輿が上下にもまれ、手締めをした後、その家の奉納した御神酒が神輿にかけられます。余った御神酒は担ぎ手にまわされ、果物や野菜、漬け物やすし、ビールやジュースなどが振舞われます。また、ご招待の家には神官があたり、床の間やしつらえられた祭壇に大杉様のお札を納め、お祈りをしていきます。

沿道の家々には、水を張った桶やバケツが用意されていて、神輿や担ぎ手に向かって豪快に水がかけられます。神輿を盛んにもみ、また水をかけるのは、与助の出会った暴風雨にちなむものとされています。



オカモミ



カワモミ



激しくモム



当番の選挙

オカモミ・カワモミ

神輿を激しく揺り動かすことを一般にもむと言いますが、葛和田の大杉様の場合、担ぎ手四人が神輿の屋根に登り、四隅に足をかけ、頭をぶつけあって力くらすることを「モム」といいます。この時屋根の杉飾りははずされず。陸上での力くらするを「オカモミ」、利根川での力くらするを「カワモミ」といいます。カワモミでは二段三段となって人が重なりあい、しぶきをあげて水中に落ちてゆき、まことに勇壮です。しかし、一見豪快なカワモミも、力任せに上の人を引きずり降ろせばよいというものではなく、しっかりと組み合ってからモミあうのが、伝統の美しい形とされています。

水辺の祭り

水辺での祭りは古くから行われ、市内の遺跡からは、平安時代の齋串（地面の四隅に差して結界をつくる串）や人形（依代として穢れを負わせ、川などに流す）などの祭祀具が出土しています。神輿が川に入る行事は、秩父地方の川瀬祭りなどが知られています。また、『大里郡神社誌』に「大野の御旅所に到り更に大字俵瀬を終点として利根の川瀬に浸りて水上渡御の御儀を畢りて還御せらるゝを古例とす」とあるように、かつての大杉神輿は、利根川を流れてくだったといわれ、市内出来島の夏祭りでは、現在も利根川の中で神輿渡御が行われます。これらは災厄を水によって流す祓いの行事で、大杉様の祭りでは、水難守護と同時に、サイノカミやナナバンゲと重ねて、人々が疫病にかからず、暑い夏を乗り切れるよう祈られてきたと考えられます。

祭りの翌日

祭りの翌日、朝から準備の時と同じように人々が集まり、片づけが行われます。当番は祭礼費を計算し、各方面への支払いなどを手分けして行い、同時に、大杉様のお札を各戸に配り、祭礼費の集金も行います。このことから、祭りの翌日は「勘定寄り合」とも呼ばれます。

宮元ではその後は直会となり、翌年の当番の選挙が行われます。皆で投票して入れ替わる六名を決定すると、新しい大頭から挨拶があり、翌年の祭りへとつながっていきます。

主要参考文献

- 群馬県教育委員会 一九七二 『群馬県民俗調査報告書第十四集 千代田村の民俗』
- 妻沼町誌編纂委員会 一九七七 『妻沼町誌』
- 蘆田伊人編集校訂 一九七七 『新編武蔵風土記稿』第十二卷 雄山閣
- 福島東雄 一九七九 『武蔵志』『新編埼玉県史資料編一〇(近世一)』 埼玉県
- 岡田定雄 一九八四 『大杉様由来』
- 埼玉県神職会大里郡支会編 一九八四 『大里郡神社誌』国書刊行会
- 埼玉県教育局文化財保護課編 一九八五 『埼玉県祭祀基本資料収集調査報告書 埼玉の祭り』
- 埼玉県立民俗文化センター 一九八八 『埼玉県民俗芸能調査報告書 第七集 埼玉の祭り囃子I(児玉・大里地方編)』
- 埼玉県立さきたま資料館 一九八九 『歴史の道調査報告書第十集 利根川の水運』
- 埼玉県立民俗文化センター編集 一九九七 『埼玉の祭り・行事調査事業報告書 埼玉の祭り・行事』
- 大島健彦編 一九九八 『アンバ大杉信仰』 岩田書院
- 熊谷市立図書館市史編さん室 二〇〇四 『熊谷市史調査報告書 民俗編(第一集) 年中行事』
- 大島健彦著 二〇〇五 『アンバ大杉の祭り』 岩田書院
- 千葉県立関宿城博物館 二〇〇五 『平成十七年度千葉県立関宿城博物館企画展示図録 高瀬船物語』
- 熊谷市教育委員会 二〇〇六 『熊谷市史(旧妻沼町編) 調査報告書 民俗編(第一集) 年中行事』

助成

財団法人地域創造

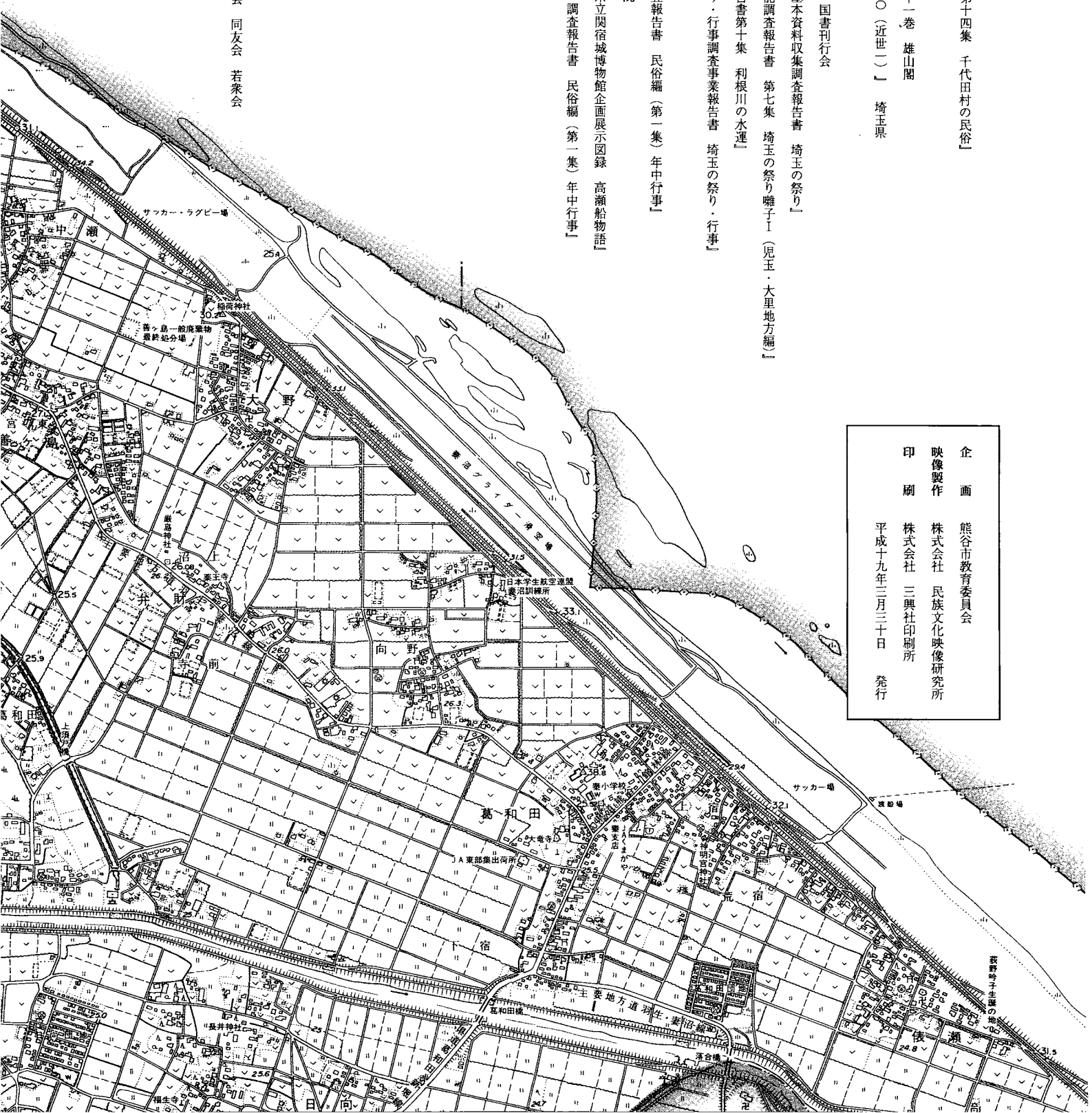
指導協力(敬称略)

財団法人地域創造

埼玉県教育委員会 飯塚好 三田村佳子

協力(敬称略)

- 葛和田・大野・俵瀬地区の皆さん
- 神明社 大杉神社祭祀行事保存会 大杉神社愛好会 同志会 同友会 若衆会
- 国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所
- 千葉県立関宿城博物館
- 上尾市教育委員会 小鹿野町教育委員会 千代田町
- 日本学生航空連盟



企画 熊谷市教育委員会
 映像製作 株式会社 民族文化映像研究所
 印刷 株式会社 三興社印刷所
 平成十九年三月三十日 発行